エッセイ

三介殿（信雄）のなさることよ（宇陀雑感）

槙　良生

はじめに

昨年11月名古屋から近鉄で大阪へ向かう際に、榛原（はいばら）駅で途中下車して大宇陀（おおうだ）の里を訪れた。奈良盆地の東に位置する同地は、古来「阿騎野（あきの）」と呼ばれ、宮廷の薬猟（くすりがり）の地として日本書紀にも記録が残っている。江戸時代にここで薬問屋を営んでいた細川家は、明治期に藤沢薬品工業株式会社（現アステラス製薬）を創設したのであった。この細川家の旧宅は商家町宇陀松山の面影を残す建造物として「宇陀市歴史文化館薬の館」として公開されている。展示されていた薬に関する資料とは別に1枚の武将の肖像画が掛かっていた。この人こそ戦国の覇者織田信長の次男で、大和の宇陀松山藩初代藩主の織田信雄（のぶかつ）である。織田信雄と聞くと、凡庸、優柔不断、大うつけの軟弱大名と評するのがほとんどである。生前からもあまり評判は芳しくはなかったようで、失敗の度に「三介殿（信雄の通称）のなさることよ」と蔑まれていたとされる。今回はここ宇陀の地で出会ったご縁でもあり、通説に左右されることなく今一度彼の生涯を辿り、その真実に迫りたいと思う。

信雄の生涯

それでは信雄の生涯をざっと辿って行くことにしよう。織田信雄は永禄元年（1558年）尾張の国で信長と側室・生駒吉乃（きつの）の次男として生まれた。隣国伊勢の北畠氏とは戦闘状態にあったが、永禄12年（1569）和議の条件として、まだ元服前であったにもかかわらず養子として送り込まれたのである。数年後、彼は家督を継ぐと北畠具意（のぶおき）と名乗り、信長の命で反織田の家臣を粛清していくことになる。天正7年（1579）、信長に無断で1万の兵力を持って伊賀に攻め込んだものの、大敗を喫したのである。これを知った信長から厳しく叱責する手紙が残っているのである。天正10年（1582）、本能寺の変の報が届くと、信雄は京へ向けて出陣するが甲賀あたりまで来て引き返している。この時、宣教師ルイス・フロイスによると知恵の劣る信雄が部下に命じて安土城に火を放ったとされている。

清須会議の後、賤ヶ岳の戦いで柴田勝家とライバルであった三男信孝が倒れると、織田家の当主（代行）として、尾張・伊勢・伊賀、百万石の大大名になったのである。天正12年（1584）、秀吉に内通したとして重臣3名を粛清し、徳川家康と結んで小牧・長久手の戦いに突入する。この最中に家康に無断で伊賀・南伊勢などの割譲を条件に秀吉と単独で和議を結んだのである。このため家康は大義名分を失い撤退せざるを得なくなったのである。秀吉、信雄の関係は逆転し、これ以降は秀吉に臣従することとなった。

天正18年（1590）、小田原征伐により北条氏が滅亡すると、関東に国替えになった家康の旧領への転封を命じられた。織田伝来の尾張、北畠の伊勢からの移動に難色を示したところ、秀吉の逆鱗に触れて改易されてしまったのである。下野に流された後、出家して常真（じょうしん）と名乗った。こののち各地を転々とするが、文禄の役のころ家康の仲介もあり、秀吉に許されて御伽衆（おとぎしゅう）に加えられて、嫡男織田秀雄と合わせて7万石を与えられた。秀吉の死後、関ケ原の戦いでは旗幟鮮明ではなかったが、戦後に秀雄ともども又も改易されることになったのである。こののち信雄は淀殿と従弟の関係にあったことから、豊臣家に出仕した。

慶長19年（1614）、大坂冬の陣の直前に大坂城を出て徳川方に寝返ったのである。戦後、家康から大和宇陀郡と上州甘楽（かんら）郡の合わせて5万石の領地をもらっている。隠居ののち、四男信良に上州小幡藩2万石を分知し、大和宇陀松山藩は五男高長に与えている。晩年は

京都北野に隠棲して茶道や鷹狩りを楽しんだと言う。信雄がその波乱に富んだ73年の生涯を終えたのは、寛永7年（1630）のこと、すでに三代将軍家光の時代になっていたのである。

うつけの真実

それでは、本題のうつけの「検証」に移ろう。うつけとされた5つの「三介殿のなさったこと」を一つづつ解明してゆくとする。

①天正伊賀の乱（伊賀攻め失敗）↓「こんな調子なら親子の縁を切るぞ」と脅し文句のある手紙が「信長公記」に全文が掲載されているのだが、筆まめな信長にすればこの程度のものは他にもあったはずで、手紙は親としての注意に留まっている。

②安土城放火↓ルイス・フロイスが噂を書いたものだが、本能寺の変後の混乱（略奪など）による失火と考える説が現在は多い。

③小牧・長久手合戦（単独講和）↓家康は局地戦で優勢に戦っていたが、伊勢の国内では信雄は苦戦しており、秀吉はここを見事について脱落させる作戦であったと思われる。単独講和を批判する記述が多いのは、神君家康を崇めたころからである。

④家康旧領への転封拒否↓秀吉にとって拒否は想定の範囲内であり、これに従ったとしても旧主は不要であり、いずれ改易は免れなかったと思われるのである。

⑤大坂冬の陣の出奔↓直前に信雄が豊臣方の総大将になるという噂があったようである。おそらくはこれを流したのは豊臣側で織田家惣領の旗印が欲しかったとも言えよう。信雄はさすがにそれには乗らなかったのである。

このように見てくると、特に信雄の行動が必ずしも大うつけにあたるとは思えないのである。最後に彼の功績面にも着目してまとめていくとしよう。

おわりに

上州小幡については養蚕業をはじめ産業の育成に力を入れたという。また、孔子の論語から名づけたという「楽山園」は優雅な庭園で国の指定名勝になっている。彼には産業育成や文化・芸術方面には才があったのかもしれない。茶道や能にも通じていたようで、寛永5年（1628）、江戸城での茶会に家光から招待を受けているのである。また、政略面についても本能寺の変のあとの天正壬午の乱において、徳川と北条の中を取り持ったのは信雄である。仲裁は力がなくては務めることはできない。そして、なによりも織田信長の血筋を宇陀松山藩と小幡藩の2系統で残したことである。それぞれ形を変えながらも、柏原藩（兵庫）と天童藩（山形）として江戸時代を生き抜いて、現代まで繋がるのである。

父信長と兄信忠はともに本能寺に倒れ、弟信孝も非業の死を遂げたため、信雄が事実上の当主となった。しかし、父の時代には配下であった秀吉と家康は必要な時には彼を利用し、役目が済めばぼろ布のように打ち捨てたのである。2度の改易を経て屈辱にまみれながらも、なお大名として復帰することができたことをみるとそれなりの力はあったとも推察される。政権を簒奪した秀吉、家康にとって生き残った織田家の惣領はうつけでなければならなかったのであろう。秀吉、家康とどうしても比較されるため、実態以上に低く評価されがちではなかろうか。豊臣と徳川のせめぎあいの中で翻弄されながらも、気高く生き抜いたことは十分に評価できると思われるのである。

【参考文献】
「織田家の人々」
（小和田哲男著：河出書房新社）
「現代語訳　信長公記」
（太田牛一著：人物文庫）
「織田信雄」
（鈴木輝一郎著：新潮社）
「虚けの舞」
（伊藤潤著：講談社文庫）

このほか、ウイキペディア、宇陀市、宇陀市歴史文化館等の資料を参考にした

織田信雄像（総見寺蔵）